

日本語の流音音素の音配列とその役割—韓国語との対照からわかること

高山知明（金沢大学 人間社会研究域・歴史言語文化学系）

日本語の流音音素（ラ行子音）は和語の語頭に現れない点が知られているが、それだけに留まらない形態レベルの音配列の特徴があることをまず指摘する。

流音音素がどのような語にどのように現れるかという観点から、その現れ方を整理すると、以下ようになる。

- (a)用言複合体内において重要な役割を演じる（語頭以外の用言の語幹・活用語尾、助辞）。
- (b)名詞の語内（語頭以外の語基内、接尾辞の頭）によく現れる。
- (c)名詞に後置する助辞の頭に現れない。

本発表ではこのうちの(c)にとくに注目する。(c)は言い換えると、助詞には流音音素で始まる形がない、というものである。これは歴史的に見ても顕著な特徴である。また、この点是用言複合体内における流音音素の現れ方とも対照的で、用言複合体内では、いわゆる助動詞に流音音素で始まる形があるように、流音音素を頭部に持つ形態を存在させており、同じ付属形式でも助詞と助動詞では相違する。この差異は、偶然ではなく、日本語の流音音素の役割にとって無視できない問題であると考えられる。

この問題を考える上で、韓国語における流音音素の現れ方はたいへん示唆的である。韓国語では、(eu)ro, (r)eur など、日本語の助詞に対応する形式に流音音素で始まる形態がある。さらに、名詞+助詞の連続において、日本語と大きく異なる点として、韓国語ではリエゾンを生じること、歴史的に見て母音調和が生じていたことが指摘できる。これらの特徴と、流音音素の現れ方は並行的な関係にあることを論じる。助詞という語の性質上、数こそ少ないものの、両言語のこの相違は注目に値する。

このように両言語における流音音素の現れ方は表面的には異なっており、対照的に見える。しかし、流音音素の役割を考えると、この差異の存在は、むしろ流音音素の音配列上の特性がその基本において両言語に共通することをむしろ逆に示していることがわかる。本発表ではその内部構造上の顕著な類似性を指摘するとともに、形態の繋ぎとしての流音音素の役割に注目する。

以上に論じる問題は、いわゆる「膠着性」といわれる性質に深く関連する。そこで、本発表では、現象上の問題を切り分けるなかで、「膠着性」といわれる性質をより厳密化して捉え直し、分析的に把握することも併せて提示する。また、音配列の特徴が、文構造上の特徴とどのような関わりを持つかという点でも、興味深い問題であることを指摘する。